

yamada taichi

山田太一

作品集
9

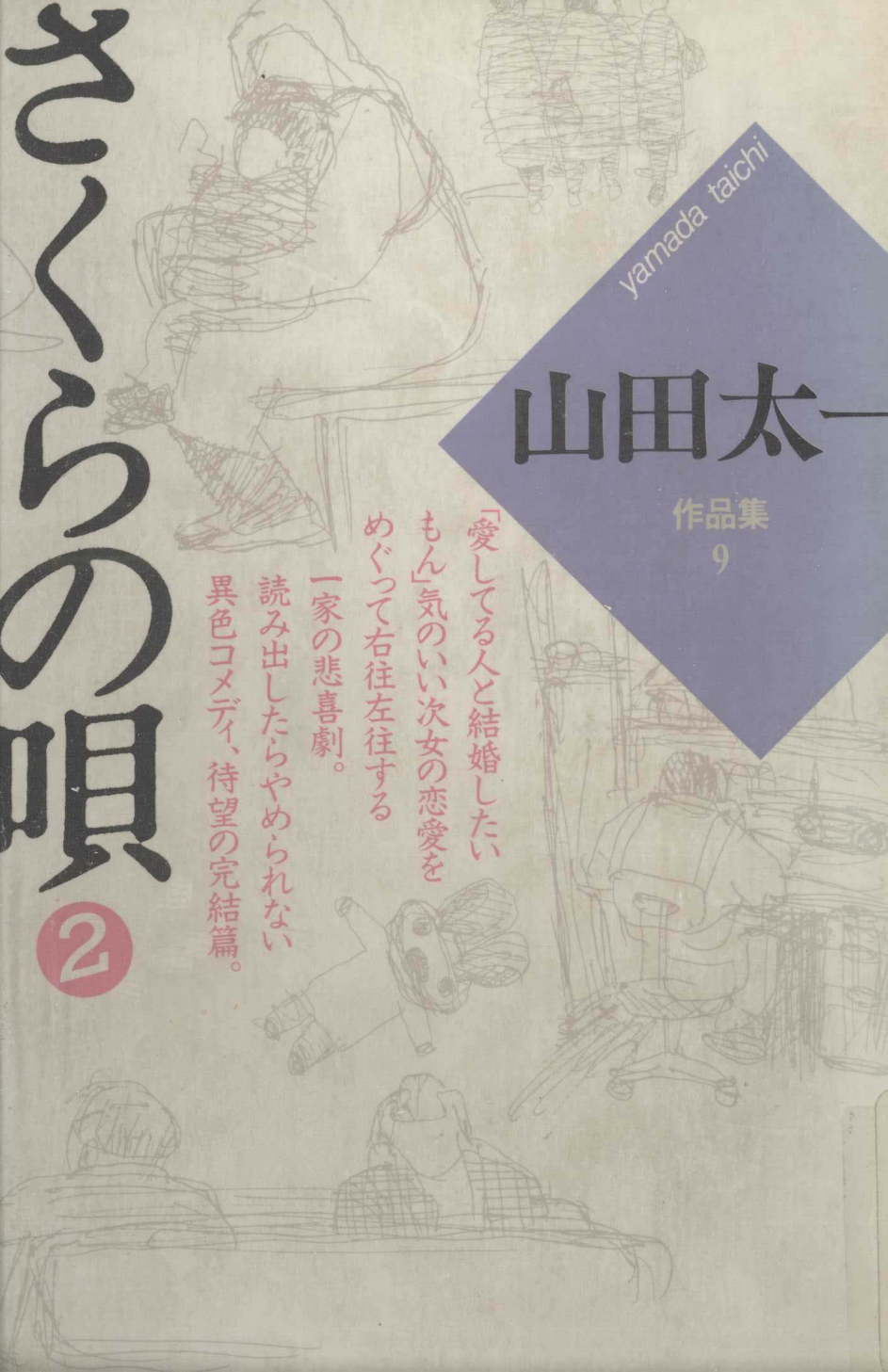
さくらの唄

2

「愛してる人と結婚したい
もん」気のいい次女の恋愛を
めぐって右往左往する

一家の悲喜劇。

読み出したらやめられない
異色コメディ、待望の完結篇。



さくらの唄^②

山田太一

作品集

9



大和書房

山田太一作品集—9

さくらの唄②

1986年4月10日 第一刷発行

著者—山田太一

発行者—大和岩雄

発行所—大和書房

東京都文京区関口1—33—4 〒112

電話番号(203)4511

振替東京6—64227

印刷所—信毎書籍印刷

製本所—ナショナル製本

装幀—菊地信義

装画—田中靖夫

©1986 Taichi Yamada Printed in Japan

ISBN4-479-55009-7

落丁本・乱丁本はお取替えます

山田太一作品集 9

●産院・廊下（夜）

誰もいない。急に赤ん坊の泣き声。足音がして伝六玄関の方から現われ、声は押さえて、

伝六「お、もう生まれちゃったか（と立止る）」

加代「（続いて来て）まさか（と振り向く）」

泉「（なおみと共に来て）え？」

加代「うまれないわよねえ、まだ」

伝六「急にお前ワッて泣き出したんだ（と泣き声の方を指す）」

加代「産院だものねえ（と泉にいう）」

泉「まだだと思うけど（待合室を指し）あ、あそこね」

進「（その待合室のドアを中からあけ）全員来たの？」

伝六「どうだ？ うまれたか、もう（行く）」

進「ううん」

加代「そりゃそうよ。そんなに早くうまれる訳ないじゃな

3—さくらの唄・2

い」

伝六「そんなこと分るか（と待合室へ）」

●待合室

伝六「お前の時なんか、お母さんがちょっとどうもおかしいってんで（中にいる人に気付いて会釈する）今晚は」

基二はいない。西村(26)とその妻の母、輝子(50)がいて「今晚は」と一礼。

伝六「お母さん、ひとりで（と続けるが）」

泉「（入って来て）今晚は」

輝子「今晚は」

進「ジュースもらっちゃったの（と小さくいう）」

泉「あら」

輝子「いえ、丁度一本余分だったもんですからね」

泉「御馳走さます」

伝六「そりゃどうも」

輝子「いいえ。しっかりした息子さんで」

泉「いいえ」

加代「すぐなんか貰わないの（と進をつつく）」

進「だって——」

輝子「いい、いいっていったのよねえ。おばさんが無理にね」

進「いいえ——」

泉「まだ子供なんですよ、なんだか」

伝六「口ばかり生意気でねえ（と微笑）」

輝子「いいえ」

加代「（進に）中西さん、何処？」

進「あ、姉さんのところ（と泉の方へもうい）」

泉「逢えるの？」

進「ううん。ぼくは駄目だっていわれちゃったけど」

加代「そりゃそうよ」

泉「ずっと付き添うのかしら？」

伝六「亭主がかよ？」

進「そうじゃないと思うけど——」

輝子「そうじゃないんですよ」

泉「あ、さよですか？（と見る）」

輝子「予備室っていうのがあるんですよ。分婉予備室って

いったかしら？（西村の方を見る）」

西村「ええ」

輝子「うちのもさっきまでそこにいたんですけど、その間

は、一人ぐらいなら、傍にいてもいいっていわれまして

ね」

泉「さよですか」

●分婉予備室

二人分のベッド。一つは空。一つに麗子。その傍に基

二。

麗子「どういうんだらう（と悪そうにいう）」

基二「いいじゃないか（と微笑）」

麗子「あんな痛かったのに、全然痛くなくなっちゃって」

基二「またすぐ痛くなるさ」

麗子「そうならいいけど——」

基二「責任感じることはないよ」

麗子「（はにかんで）大さわざしちやっただんだもの（と微笑）」

笑」

基二「（微笑して）とんだハネムーンだな」

麗子「ほんと（すまなさそうに基二を見て微笑）」

泉「（ドアをあける）」

基二「（振りかえり）あ（と立つ）」

麗子「お母さんも来たの？」

泉「どんな？（と微笑）」

基二「ちょっと痛みが遠くなってるようなんですけど

——」

泉「そう。いいじゃない、慌てなくなっちゃって」

麗子「誰と来たの？」

泉「みんな。なおみちゃんも」

麗子「お父さんも？」

泉「うん（風呂敷包みを見せ）これ、寝間着とさらしいな

かね」

麗子「あ、そこらに置いていい」

基二「すいません（と受けとり）あ、どうぞ（と丸椅子を

すすめる）」

泉「いいの。すぐ行くから」

麗子「困るわ、待ってられても」

泉「気にしないの、そんな事」

基二「多少時間がかかるかもしれないって」

泉「先生？」

基二「いえ、看護婦さんが」

泉「そう」

麗子「陣痛を早くする注射あるでしょう」

泉「なにいつてるの。初産にしちゃ、年が行ってるんだもの。不自然なことはいけないわよ」

麗子「帰って」

泉「うん。適当にね」

麗子「この人いてくれればいいもの」

泉「この人だなんて。基二さんとおっしゃい」

麗子「だって——」

泉「なにがだってよ（と笑い）でも、いま帰れていって
も帰らないわ、お父さん達」

麗子「どうして？」

泉「興奮しちゃってるもの。家へ帰ったって眠らないわ」

麗子「大きな声出さなきゃいいけど——」

泉「大丈夫よ。お父さんだって——」

伝六の大きな笑い声が聞える。

●待合室

加代「お父さん」

進「お父さん、声大きいよ」

伝六「あ、そうか。いや（輝子へ）根が正直なもんでね。

どうも小さい声ってえのが出せなくて。フフフ」

輝子「そうですか。はじめてのお孫さんじゃあねえ」

伝六「ええ。家にいても落着かないから（と笑い）みんな

ね、みんなひき連れて、うまれたてを見ようじゃないか
ってねえ。ハハハハ」

加代「お父さん」

進「大きいよ、声が」

伝六「あ、そうか。フフフ（ドアがあくのでその方を見
て）あ、どうしてる？」

泉「うん。ちょっとね、まだ、間^{*}がありそうだって」

伝六「行つて来るかな（と立つ）」

加代「いいわよ、お父さんは」

伝六「なにもいいじゃねえか」

加代「だっていいの？（と泉に）男が行つて」

伝六「親がいけねえ訳ねえだろうが」

泉「他の人がいないからいいでしょうけど」

進「大きな声出さないでよね」

伝六「分つてらあ、そんな事。人前でお父さんを間抜けの
ようにいうんじゃないよ」

泉「は、す向いですからね」

伝六「ああ（輝子の方へ）じゃ、ちょっと」

輝子「はあ（と一礼）」

伝六「（一礼して出て行く）」

加代「部屋間違えるとやだわ、お父さん（とドアへ行く）」

泉「大丈夫よ」

輝子「いいお父さんですねえ」

泉「いえ。もう」

輝子「あったかそうな方ですわ」

泉「いえ。なんだか大ざっぱな人なものですから」

●分鏡予備室

伝六「（あけ）おう」

基二「（立上り、一礼）」

麗子「やだ、お父さん」

伝六「なにが、やだ？」

麗子「家中でやあよ。入れ替り立ち替り」

伝六「他の者はよこしゃあしねえや。どうだ？ まだ間が

あるそうじゃねえか」

麗子「だから帰っていいわよ」

伝六「来たばかりなのに、そんな事いうなよ」

基二「どうぞ、これ（と丸椅子をすすめる）」

伝六「十二時すぎちまって惜しいことしたよなあ（と基二の方は見ないで椅子に掛ける）」

麗子「どうして？」

伝六「そりゃお前、結婚式の日に赤ん坊うまれたなんての

は、面白いじゃねえか」

麗子「翌日うまれたって、相当よ」

伝六「ま、そうだ。仲々いいえやな、こういうのは。ハハ

ハハ」

麗子「大きい（声が）」

伝六「分ってるって」

麗子「もう行って」

伝六「なにも、そう追い出さねえでもいいだろう」

麗子「だって、（基二が）立ってるし」

基二「いいんだよ」

伝六「まだ一分もたってねえだろうが。よくまあヌケヌケ

亭主の心配ばかり出来るな」

麗子「だってエ」

基二「じゃ、あの、ちょっとの間お父さんお願いします」

伝六「あ、いいけど」

基二「ちょっと、お手洗いへ（とドアの方へ）」

麗子「いいのよ、氣イ利かさなくたって」

基二「そうじゃないよ（とドアをあける）」

伝六「トイレぐらい行かしてやれよ。ゆっくり行つて来な」

基二「はあ（と閉める）」

麗子「行つたばかりなのよ」

伝六「また行きたくなつたんだよ。駄目だ、もうあれは」
麗子「なにが？」

伝六「老化現象だ。小便近くなつてんだ」

麗子「そんな事よくいうわねえ」

伝六「保険入っとけよ、保険」

麗子「お父さん！」

伝六「冗談だよ」

麗子「結婚式の晩に、そんなことないでしょう」

伝六「女つてゑのは、冗談が分らねえんだから」

麗子「冗談にしたつてよ」

ノックして、すぐドアがあき、

看護婦「静かにして下さいねえ（伝六を見て）どなたです

か？」

伝六「あ、この父でね。フフフ」

看護婦「待合室の方にて下さい（と去る）」

伝六「はあ」

麗子「ほら、見なさい。帰った方がいいわよ」

伝六「そんなことばかりいうな」

麗子「うちの人のいれればいいもの」

伝六「そんなことばっかりいうなつていつてんだ！」

●待合室

控えめな笑いが、一同にひろがって、基二が戸口に近い所に腰をかけている。

7—さくらの唄・2

輝子「ええ。うちの方は、三年半で漸くなんですよ」

泉「さよですか」

輝子「早い方がいいつて随分いいんですけれど」

泉「いまの若い方はねえ」

輝子「子供をつくる前に遊ばなくちゃなんて（と笑う）」

泉「ねえ——」

輝子「お宅さまも、失礼ですけど随分お母さま、お待ちになつたんでしょう？」

泉「はあ」

輝子「ねえ。五、六年ですか？ 御結婚なさつて？（と基二へきく）」

二（きく）」

基二「はあ——」

加代「あ、あの〆何年かというと——」

進「姉さんが答えることないじゃないか」

泉「まだ一年なんですよ」

輝子「あら」

泉「去年の丁度今頃、式をあげまして」

輝子「さよですか」

加代「そうなんです。フフフ」

泉「ちょっと遅い結婚だったもので」

輝子「遅い方が、円満に行くっていいものです」

泉「はあ」

加代「あのさ、去年の今頃、お姉ちゃん、暑くて大変だったわよねえ、花嫁さんで」

泉「フフ」

輝子「そうでしょねえ」

進「でもあの、式場は冷房してあったから」

加代「あ、そうか」

なおみ「でもあの、かつら、やさ、内掛けなんかつけると、相当暑いと思うけど」

加代「そうよ。暑いのは、男は分らないでしようけど」

輝子「そうですよねえ」

泉「夏は避けようっていつてたんですけれど——」

輝子「いろいろご都合がありますもの」

泉「はあ」

輝子「そうですか。去年の夏ですか（ドアを見る）」

伝六「（基二を見て）なんだい？ あんた、此処にいたの

かい？（しょんぼりしている）」

基二「はあ（と立つ）」

伝六「行ってやってくれよ」

加代「あ、私行こうか」

伝六「いいんだって。あんたじゃなきゃやだよ」

基二「（苦笑して）じゃ」

輝子「心細いんだわ（と笑う）」

伝六「なにもねえ（ドアの方を見る）」

基二「（出て行く）」

伝六「いくら昨日結婚したばかりでもよ」

進「お父さん」

加代「お父さん」

泉「去年の昨日ってことよね」

伝六「うん？」

加代「昨日結婚するわけじゃないじゃないの」

伝六「だってお前、十二時すぎりゃあ昨日だろうが」

進「昨日で、今日赤ん坊うまれる訳ないじゃないか」

伝六「うまれるわけないって——」

泉「いいのよ。去年の昨日を、お父さんはまあ（と笑う）」

加代「ほんとよ（と伝六を叩き）やだ、お父さんは」

進「やだよ（と叩く）」

伝六「なに、いいように、お前ら叩くんだよ」

ドアがあき、看護婦中を見る。一同、シンとする。

看護婦「二時すぎですよ。もう少し小人数でお待ちになったら、どうでしょうか？（と閉めて去る）」

●分娩準備室

時間経過。麗子、目を閉じている。基二、丸椅子に掛け腕を組んで目を閉じている。

麗子「（目をあく）——（基二を見る）」

基二「——」

麗子「も、も（といいにくく）基二さん」

基二「——（こたえない）」

麗子「あ、あ、あなた——あなた——」

基二「——（眠っているらしい）」

麗子「よく倒れないわね（と基二がいとしく微笑し）ほんとに結婚しちゃったのねえ。こんなこと、ないかと思つた。嘘みたいよ」

基二「——」

麗子「あ——あ、あなた。旦那。うちの人。主人。亭主。

宿六。パパ。お父さん、お父ちゃん——基二さん、あなた——私、奥さん——奥さんか。奥さん——奥さん。ハ—イ。奥さん、大根安いよ。あら、そう。なんて——フフ、奥さま、奥さまでいらつしやいますか？ はあ。まあ、奥さまでいらつしやいますかア。ホホホホ」

基二「どうした？（と見ている）」

麗子「あら、起きた？」

基二「どうした？」

麗子「やだ。寝てると思つて独り言いつてたのよ（と微笑し）」

基二「そうか（と苦笑して目をこする）」

麗子「待合室へ行って」

基二「いいよ」

麗子「だって、その椅子、寄つかかれないじゃない」

基二「大丈夫だ」

麗子「やっぱり、いや？」

基二「なにが？」

麗子「お父さんと一緒にいるの嫌でしょ？」

基二「嫌って事はないさ」

麗子「荒っぽいものね」
基二「余計な心配しなくていいんだよ」
麗子「うん——」

●待合室

伝六「（腕組みをしてイビキをかいている）」

加代、なおみ、進、輝子、西村、みんな目を閉じている。眠っている。泉、ひとり、胸を押さえている。発作の予感がある。

泉「お父さん——（小さく呼ぶ）」

伝六「——（気がつかない）」

泉「加代ちゃん（ちょっと息を荒く）」

加代「——（気がつかない）」

泉「進——なおみちゃん」

進「——（何処かで赤ん坊の泣き声）」

なおみ「——」

泉「（目を閉じ、息を荒くして胸を押さえている）」

慌ただしい足音がして看護婦、ドアをあけ、

看護婦「西村さん（と輝子にいう）」

輝子「あ、はい」

看護婦「おうまれになりました。女の子さんです。おめでとうございます。二時五十六分でした（と行く）」

輝子「あ、ありがとうございます（と立つ）」

西村「あの、逢えるんでしょうか？（立つ）」

輝子「聞いて」

西村「ええ（と廊下へ）」

伝六「おめでとうございます」

輝子「ありがとうございます」

加代「おめでとうございます」

進「おめでとうございます」

なおみ「おめでとうございます」

輝子「ありがとうございます。あの、ちょっと（と西村の

後を追って廊下へ）」

西村の声「ええ、あの母親には逢えるんでしょうか？（と

廊下でいっている）」

輝子の声「ありがとうございました」

伝六「先を越されたなあ」

加代「いいわよう」

進「前に来てたんだもの」

なおみ「もうじきですね、こっちも」

伝六「ああ。フフ（と泉を見て）どうした？ お母さん」

泉「座ったまま無理に笑顔をつくって）ううん」

加代「青いわ、顔」

進「どうした？」

なおみ「奥さん」

伝六「どうした？」

泉「先生、いないかしら、心臓のことが分る（とやっとい

う）」

伝六「そ、そりゃあいらあな」

進「呼んで来るよ、待ってて（ととび出して行く）」

加代「お母さん——」

泉「麗子ちゃんには黙ってて——」

伝六「なにいつてんだ。どうした？ お母さん」

泉「大丈夫。大丈夫だけど——（と目を閉じてしまう）」

加代「お母さん」

なおみ「奥さん」

伝六「お母さん」

●高松家・玄関（未明）

軒灯の灯りが中へ漏れている。外から進が鍵をあけて
いる影。タクシーのドアの閉る音。

走り去る音。戸をあけて、

進「（タクシーをおりたところに加代となおみにささえら
れて立っている泉に）お母さん、おぶうよ（と背中を向
ける）」

泉「大丈夫。もう大丈夫なのよ」

加代「でも、おぶさったら」

泉「半分神経なのよ（と加代につかまりながら玄関へ）」

進「なおみちゃん、かわるよ」

なおみ「いいです（泉を助け）戸締りお願いします」

進「ああ。足元、気をつけて」

加代「疲れたのよねえ。結婚式から、ずっとだもの」

泉「そう。少し温和しく寝てるわ」

加代「あがれる？」

泉「うん——（と上へあがる）よいしょ（溜息をつき）あ

ー、やっと家（とちょっと笑い）やだものね、タクシーの中で死ぬなんて」

加代「やだ、お母さん」

なおみ「奥さん」

進「お母さん」

●待合室

伝六「（前シートの声につき上げられるように、不安な顔で立上る）」

ひとり、である。

●分娩予備室

麗子「（クスクス笑い）大げさなのよ、家って。こういう時も、夜中でも家中で来ちゃうでしょう。いいっていうのに、そうやってみんなで無理して、くたびれて、あとで不機嫌になっちゃったりするの」

基二「（微笑している）」

麗子「もう少し合理的になったら、なんてよく私いうんだけど、ワイワイ家の者の心配したりするのが好きなのよ

ねえ、みんな」

基二「（うなずいて一緒に微笑したりして聞いてやっていく）」

●泉と伝六の部屋

寝ている泉。伝六の蒲団は二つ折りにされて脇へどけられていて、加代、進、なおみいて、

加代「私が寝るわよ。あんたなんか、お母さんの世話出来っこないじゃない」

進「姉さんなんか、地震があつたって目エさめないじゃないか」

なおみ「私が、寝ます。私、わりと目ざとい方だから」

加代「とんでもないわよ。誰が考えたって——」

泉「もめないで」

加代「え？」

泉「もめないで」

加代「あ、ほら見なさい。お母さん、うるさいじゃないの」

進「ワーワーいってるのは自分じゃないか」

加代「だって、あんたがお母さんの傍へ寝たいなんていうから」

進「寝たいとはいわないだろう。赤ん坊じゃあるまいし」

なおみ「もめないで下さい（と小声で強く）」

進「分ってるよ。じゃ、姉さん、グーグー眠るなよな（と

立つ」

加代「寝るわけないじゃない」

泉「なにいつてるの（と苦笑）」

進「お母さん、おやすみ」

泉「おやすみ」

なおみ「お休みなさい」

泉「御苦労さま」

なおみ「いいえ——」

進「（出て行きながら）なんかあったら起こせよな」

加代「分ってるわよう」

●待合室（薄明）

基二「（ドアをあける）」

伝六「（テーブルに腰をかけて、不安な気持を押さえていて振りかえり）おう」

基二「おひとりですか？」

伝六「ああ。みんないても仕様がねえからな」

基二「そうですか（と微笑して、ドア閉める）」

伝六「（気づき）あ、はじまったのかい？」

基二「いえ。漸く眠ったもんで」

伝六「そうかい」

基二「お父さんもお帰り下さい」

伝六「そんな訳にはいかねえやな」

基二「分婉室へ入ったら電話します」

12

伝六「まあ、いいやな」

基二「お疲れでしょう」

伝六「一晩ぐれえなんでもねえやね」

基二「それでしょうけど——二人で起きていても同じことですし」

伝六「うむ——」

基二「いえ、勿論いて下さる方が心強いですが」

伝六「帰るかな」

基二「あ、気を悪くなさったんでしたら」

伝六「そうじゃねえんだ」

基二「それでしたら（いいんですが）」

伝六「実はな」

基二「はい」

伝六「麗子にはいいうなよ」

基二「はい」

伝六「さっき、お母さんが、気持悪くなつてな」

基二「そうですか（おどろく）」

伝六「発作の前のような気がするってんで、ここの医者に診てもらった」

基二「で？」

伝六「注射して、とにかく帰って安静にしてろ、といわれた」

基二「知りませんでした」

伝六「心配ねえと思うがな」

基二「あ、どうぞ（帰って下さい）」

伝六「こっちはまあ、順調なこったし」

基二「ええ。陣痛のひと休みなんているのは、よくある事だそうですし」

伝六「悪いけど頼まあ」

基二「ええ、どうぞ」

伝六「どうも、気になっちまってな（と苦笑しかけてドアを見る）」

ドアを半びらきにして西村、廊下の輝子へ、

西村「（暗く小さく）ちょっと待って下さい」

輝子「（うなずき、泣き声を押さえつつもらして壁によりかかる）」

伝六「どうかしましたか？」

西村「はあ（と隅の上衣と輝子の手提げをとりに行きながら）ちょっと」

伝六「赤ちゃんが、なにか？」

西村「いえ。家内が、なくなりました」

伝六「え？」

基二「——」

西村「（出て行こうとする）」

伝六「だって、お産は無事にすんだんでしょう」

西村「はあ（ドアを閉めようとする）」

伝六「さ、さしつかえなかったら——」

西村「弛緩出血で、突然なくなりました。失礼します（と

ドアを閉める）」

伝六「あ（と行き）そりゃあ（と開け、廊下へ）そりゃ、御愁傷さまなことだ」

●廊下

輝子「（西村にささえられながら、泣き声をあげてよろめくように遠去って行く）」

伝六「（見送る）」

基二「（横に立つ）」

伝六「こりゃいけねえや（と咳く）」

基二「は？」

伝六「とても帰るなんてことは出来ねえや（と待合室へ）」

●待合室

基二「でも麗子は——」

伝六「いや、あの人も順調そのものだって言ってたんだ」

基二「そうですか」

伝六「やつぱりおっかねえな」

基二「はあ」

伝六「軽く見ちゃいけねえやな」

基二「はあ」

伝六「——シカン出血とかいってたな」

基二「ええ。でも、そうある訳じゃないでしょうし」

伝六「麗子ンとこ行っていいかい？」

基二「あ、どうぞ」

伝六「いや、あいつ、ここンとこ、バカにな、素直でいい娘になっちまってな。氣になつてたんだ（とドアをあける）」

基二「あ、私も行きます」

●泉と伝六の部屋

泉「天井を見ている」

加代「（寝息をたてている。洋服のまま）」

●分鏡予備室

麗子「（目をあげ、ドアの方を見る）」

伝六「（ドアをあけ）起きてたか？（と微笑）」

麗子「うん——（と微笑）」

伝六「どうだ、くたびれねえか」

麗子「大丈夫」

伝六「そうか」

基二「（ドアを閉め）お父さんだけなんだ」

麗子「あら」

伝六「他の者はな、帰した」

麗子「そう」

伝六「帰れ帰れって、追っばらっちまったア。ハハハハ」

麗子「そう」

伝六「そうって事はねえだろう」

14

麗子「どうして？」

伝六「もうちつとお前らしいいい方がありそうなもんじゃねえか」

麗子「どんな？」

伝六「またえらそうに追い帰したんでしよう」とかよ」

麗子「帰ってもらった方がよかったもの」

伝六「一番残ってもらいたくねえのが、残っちゃったとかよ」

麗子「さっきさあ」

伝六「うん？」

麗子「ちよつとお父さんに、悪いこといってたと思ってさ」

伝六「なにが？」

麗子「来てくれたのに、帰れ帰れって」

伝六「そうだよ。さっきはお前わりと調子出てたんだ、そういうええ」

麗子「ごめんね」

伝六「あの位いわなきやお前の値打ちはありやあしねえやな（基二へ）なあ」

基二「ええ。もっと元氣出せよ。お父さん、心配してるぞ」

麗子「元氣よ、私」

伝六「お前の元氣でエのは、こんなもんじゃねえだろうが。お父さん、つきとばしたり、米エぶついたり」

麗子「今、そんな事無理じゃない」